



Title	言語使用実態から読み解く社会現象：“褒美”を例に
Author(s)	宮本, 華瑠
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 7, p. 59-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語使用実態から読み解く社会現象

— “褒美” を例に —

基盤日本語学 博士後期課程 3 年

宮本 華瑠

はじめに

本稿はコーパス¹を用い「褒美」の言語使用実態を基に捉えた授受関係(誰から誰へ)、時代、事由、心情、褒美とされる対象物など多角な側面で調査を行ったものである。調査では、「褒美」と「ご褒美」の棲み分けは授受関係と大きく係わっていることが明らかとなった。「褒美」は本来「他人からもらうもの」として認識されていた言葉だったが、近年では美化語「ご」が付いた書字形「ご褒美」の使用が年々増加傾向にあり「頑張ったご褒美」や「自分へのご褒美」「ご褒美で優勝」「ペットへのご褒美」などのような新しい使用が主流になっていることが明らかとなった。その中で近年使用が増加傾向にある「自分へのご褒美」は「日々忙しく勤勉に働く人々にとって疲れを癒し、明日も頑張れるようにモチベーションを保つために必要不可欠なもの」として読み解くことができ、その発信者の多くは「女性」であることが明らかになった。

1. 調査の目的

広辞苑(第7版)の記述では「褒美」とは、「①ほめること。②ほめて与えるもの。賞与。褒賞」として説明されており、取り上げた例文には「ご褒美にこれをあげよう」が用いられている(新村出編, 2018)。少なくとも広辞苑では、「褒美」と美化語「ご」が付く「ご褒美」は区別されることなく同じ意味で扱われている。しかし、実際は「褒美」と「ご褒美」の間には棲み分けが存在し、人々は無意識に使い分けているように思われる。近年では「ご褒美チョコ」や「自分へのご褒美」など「ご褒美」の使用が広く親しまれているのではないかと疑問を持つことがある。また、「褒美」は「ほめて与えるもの」だけに限らず、「頑張って勝ち取った成果」や「自分の好きな物事を自分へのご褒美として決める」などその授受関係、ご褒美として扱われる対象物、人々の意識には益々多様化が伴っているのではないかと示唆する。本稿は

¹ コーパス (Corpus) とは、言語の実態を過不足なく反映させるべく計画的に収集した大規模な言語データである。— 日本語学会 (2018) 『日本語学大辞典』 p377

こういった疑問を解決すべく、「褒美」と「ご褒美」の言語使用実態を次のリサーチクエスチョンを持って調べることにする。

- 【1】通時的に見た時、「褒美」と「ご褒美」の棲み分けはあるのか
- 【2】「褒美」と「ご褒美」の授受関係、対象物、人々の意識にどのような変化や多様性が見られるのか
- 【3】変化が見られた時、その変化の起因は何か

2. 調査

調査の初期段階ではまず、国立国語研究所で公開している『現代日本語書き言葉均衡コーパス—中納言 Web 版(以降 BCCWJ)』を用い 1988 年～2008 年(20 年間)の「褒美」と「ご褒美」の使用実態²を概観する(図 1)。

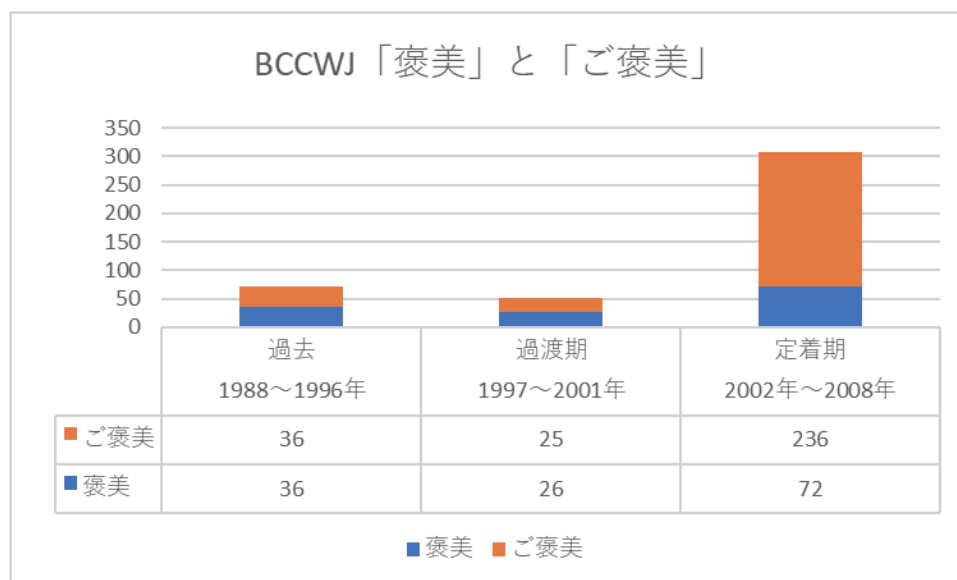


図 1 BCCWJ「褒美」と「ご褒美」の使用傾向

図 1 からは「ご褒美」という言葉は 2002 年を境にその使用が急増していることが読み取れる。

次の図 2 では、「褒美」と「ご褒美」は 1996 年以前までは主に「他者からもらうもの」として使用されていたが、1997 年～2001 年を境に「自分へのご褒美」や「メンタル(頑張って勝ち取った褒美/ご褒美)」などの新しい使用が生まれていることが読み取れる。特に、2002 年～2008 年では、「ご褒美」の使用が急速に増加し、「褒美」より「ご褒美」が広く使われていることが明らかとなっている。

² 本稿で示す「褒美/ご褒美」には、書字形「ほうび/ごほうび」の用例も含まれている。

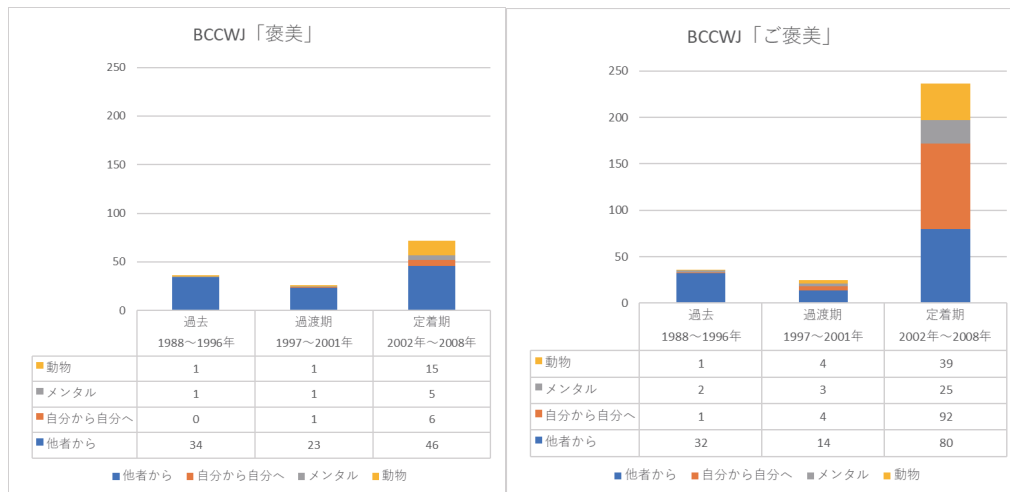


図2 「褒美」と「ご褒美」使用実態の内訳

3. 先行研究

鈴木(2013, 55)では「自分へのご褒美」は企業側が経済効果を求めて意図的に拡散した経済産物であると述べている。同氏はデータベース「日経テレコン21」を用い、「自分へのご褒美」という言葉を含む記事(2094件, 1988～2009年)を収集し、次の4つの時期に分類している。

第1期：1988～96年 「褒美」は自分で購入するものではない時期。

第2期：1997～2001年 対象の広がりが始まる時期。特徴はスポーツ選手や女子アナなどの「カリスマ」的存在である有名人が自らの「自分へのご褒美」消費について記事で語ったことがきっかけとなった点。

第3期：2002～06年 拡大した時期。「自分へのご褒美」消費が現象として注目を集め、メディアの報道数が増え、消費行動を活用した企業活動が増える。

第4期：2007年～ 定着期。社会に定着したことで「自分へのご褒美」というフレーズが使われやすくなったこと。「プチご褒美」という新語が発生。「自分へのご褒美」用の新ブランド「ショコイスト」が立ち上がる。

同氏の得られた通時的変遷傾向は、本稿で調べたBCCWJのデータと概ね一致していることが確認できる。

4. 分析

自分から自分へ：褒美(7例)/ご褒美(97例)

【心情表現】誰にでも必要、とても大切なこと、次の日も元気が出る、「明日もがんばろう」と思える、モチベーションが確実にアップ、毎日がどんどん楽しくなる、疲れが癒される、なかなかいい、和む、嬉しい、鼓舞、感動

【ご褒美の中身】

日常的レベル：そんなに大した物でなくてもいい(甘党の人なら、大好きなケーキとコーヒでもいい、辛党ならば、お酒のおつまみを少し贅沢なものにする)、おいしいビ

ールを飲む、余分に手に入ったお酒、夜ビールを飲むひととき、デスク小物(ブランドでそろえる)、好きなものを食べるとか好きなビデオを見る、夫との外出、デートで原宿の『オーバカナル』でランチ、久しぶりにコーヒーも飲んだ、ちょっと贅沢な食事、きのうはアンジェリーナのモンブラン 今日中は村屋の月餅をおやつにいただく、好物のビスケット 我慢できないくらい食べたいチーズなどささやかなもの、少し贅沢なものにする、1人ランチ、毎月どこかの名産が産地直送で送られてくるサービス、ショッピング(毎回数万円程度)、時間、達成感、ビタミン剤新しいC1000、ふたつの箱を置いてそこにコインを入れていく(「いいこと箱」に五十円、ミスをしたなら「ごめんね箱」に十円)

イベント的レベル：3つ星を三十年以上獲得し続ける超一流フレンチ、海外旅行、国内温泉への1泊旅行、沖縄旅行、退職すること

【事由】

毎日頑張っている、忙しい毎日を送っている、忙しく働いているときほど、一生懸命働いた十二年、1年間深夜までほとんど休まずがんばった、寒かったし忙しかったし疲れた、仕事が1つ終わったらスケジュール表を塗りつぶしていく、毎日目標を達成、予定した通り成し遂げた、苦勞を乗り越えた、普段仕事があまりに忙しくてクタクタになる、ボーナス、禁煙成功、がんばって体重を落とした、ご褒美のタイミングの大切さを認識、精神的にも経済的にも自立するおひとりさま気持ちをリフレッシュ、子供がいる、企業からの売り込み、目的を持った旅は友達を連れ回すことになってしまうので一人旅のほうが気楽、ゆっくりまったり時間とともに過ごしてみたい

5. まとめ

本稿での調査を通じて「褒美」の社会文化的意味はつぎのように読み取れる。

- ①分析データから分かるように、「褒美」は主に他人からもらう場合に使われ、「ご褒美」は「自分へのご褒美」と「他者へのご褒美」の2類に分けることができる。
- ②「ご褒美」は1997年前後を境に、他人からもらう意味合いから、「自分へのプレゼント」として使われる割合が増え始めている。
- ③自分への「ご褒美」は「日常的レベル」と「イベント的レベル」に分けられ、かつては「イベント的レベル」が主流だったが、今日では「日常的レベル」のものが主流になっており、「自分へのご褒美」「プチご褒美」といった流行語まで生み出すようになっている。「日常レベル」のものは社会人にとって「必要なもの」「明日も頑張れる」「疲れを癒す」「モチベーションアップ」など「日々忙しく我慢強く勤勉に働く日本人」の切実なニーズを暗示する言葉として察することができたのである。

【参考文献】

鈴木智子(2013)『イノベーションの普及における正当化とフレーミングの役割：自分へのご褒美消費の事例から』白桃書房